

1-8 現代に伝わる製品と参考図(C)―日本髪用髪飾り

大正期は観劇やショッピングが女性の楽しみとして定着した時代である。和装の装身具にも変化が現われ、日本髪用髪飾りは明治期以上に多様になりデザインは洗練された。

現代に伝わる束髪用髪飾りが少なめなのに対し、大正期以降の櫛、

こうがい

ねがけ

筍、簪、根掛などの日本髪用の髪飾りは数多く残っている。まだ

日本髪が一般的な時代なので、当然とも言えるが、そこへのこだわりは現在では想像できないほどである。

だが、いろいろあっても、それらが使われた時代を明らかにすることは容易ではない。

そんな時やはり頼りになるのは当時の広告や商品カタログなどのビジュアル資料である。それらを参考に、大正前期頃に使われはじめたと思われる各種の日本髪用髪飾りを順に紹介する。

使われ始めたのは大正初期でも、それ以降、昭和初期まで長期にわたって使われ続けたものも少なくない。

櫛、こうがい 筍なかせし (中差)

日本髪用の櫛と筍には「儀式用」と「おしゃれ用」がある。この

うち、結婚式などに用いる儀式用は明治時代と変わらず半京形はんきょうがた (ま

たは中京形) と呼ばれる両サイド上かみ (耳) が角張り、棟幅と親歯幅が広い装飾のない櫛が用いられた。セットで用いられる筍には多く

の場合、花飾りで装飾された。素材にはべっ甲しほうばの他、四方張りしほうば、卵

甲らんなどの擬甲もあつた。

図1-8-1は白牡丹本店広告から。図1-8-2は大正時代の実物。

次に紹介するのは、おしゃれ用の櫛と笄（日本髪まげの髻かぶに挿す飾り）。

明治後期以降、おしゃれ用笄は多くの場合、中差なかざしと呼ばれた。

櫛と笄の形は時代によって多少の変遷がある。明治後期の櫛は、新橋形みやこがたと都形みやこがたが主流だった（『日本の宝飾文化史』図9-32）。中差にはいろいろな形があつたが、明治以来の文函形ふぼこがたと呼ばれる中心部が細く両サイドが小箱形の笄が主流（『日本の宝飾文化史』図9-33）。

櫛で大正前期によく用いられたのは、新橋形の両サイド上の角かど（耳）を丸めた都形で、大正初期の三越のカタログ（図1-8-3）や尚美



図 1-8-2
べっ甲櫛・笄
53円の価格のついた保険証付き。
笄の花飾りは別売りのようだ。

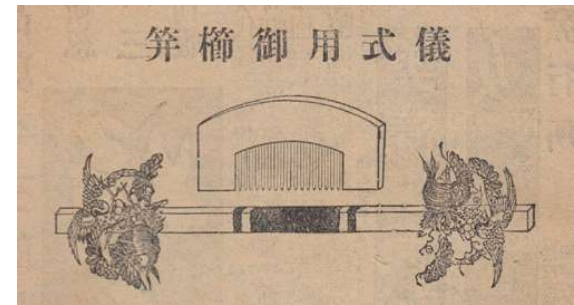


図 1-8-1
儀式用櫛・笄
白牡丹本店
大正4年10月『婦人世界』より
笄の両サイドには取り外し自由の花飾り
（花笄）が付いている。



図 1-8-5
べっ甲都形櫛と文函形筥
菊図
金飾りと貝による装飾的仕上げ。

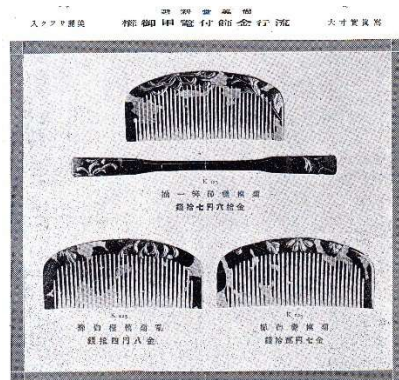


図 1-8-4
べっ甲都形櫛（筥は文函形）
菊図
尚美堂
大正 3 年 10 月『尚美堂時報』
「金飾付」とあるように、金の薄地金で菊を表現。



図 1-8-3
べっ甲都形櫛（筥は文函形）
三越呉服店
大正 2 年 5 月『みつこしタイムス』
より
22, 3~30 才向とある。

堂のカタログ(図 1-8-4)でもこの形を取り上げて紹介している。
 図 1-8-5 はその実物。
 素材は明治後期と同じく、高級品にはべっ甲、中級品には木地蒔
 絵、普及品にはセルロイドが使われた。
 華やかな装飾の多いが、図 1-8-6 のような装飾を控え目
 にした棟幅の小さい小振りな高齢者(35 才以上)向けのものもあつ
 た。

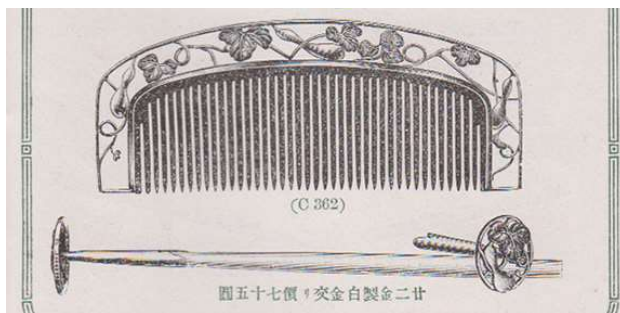


図 1-8-7

都形金 (K22) 透し細工櫛・笄

櫛歯はべっ甲、笄は両天笄

天賞堂

大正 4 年 4 月『天賞堂営業案内—貴金属装身具之部』より



図 1-8-6

小振りなべっ甲金飾り都形櫛・笄

小花図

高齢者向き。

大正前期には、**図 1-8-7**にあるような、**枠全体が金や銀の透し細工の都形櫛**も用いられた。

笄は**両天笄**。車輪状の形なので「**車両天**」ともいう。この形は明治後期からある笄で文函形に次いで多く用いられた『日本の宝飾文化史』**図 9-34**。

図 1-8-8は、それと同形の実際の銀櫛。



図 1-8-8
都形銀透し細工櫛
櫛歯はべっ甲

都形には多少アレンジされたものもあった。図 1-8-9 は背丈(山)が高く、棟幅と親歯が多少広めのべっ甲都形山高櫛。



図 1-8-9
べっ甲棟彫刻都形山高櫛

図 1-8-10 の丸嘉広告に見られる金棟櫛は、ふっくらとしたカーブの都形の両サイドを丸くした半月形状の櫛。棟は 20 金の透し彫り。中空状の作りなので、別名菓子もなかの最中から「モナカ櫛」とも呼ばれた。筭の両サイドも 20 金の透し彫り。金棟の他、一部にプラチナを使ったもの(プラチナ交り)や銀棟のものもあった。

図 1-8-11 は金にプラチナ交りの透し彫り金棟べっ甲櫛・筭。図 1-8-12 は透し彫り銀棟の櫛・筭。

図1-8-13は同じく半月形のべっ甲櫛・笄だが、櫛を金やプラチナで装飾した凝った作り。当時の最高級品で小粒真珠も嵌入されている。このような櫛の金やプラチナでの装飾は「ノセ（乗せ）模様」とも呼ばれた。



図 1-8-12
透し彫り銀櫛べっ甲半月形櫛・笄



図 1-8-11
透し彫り金櫛 (K20) べっ甲半月形櫛・笄
プラチナ交り
山崎商店 (現・田中貴金属リテイリング) の星Sマーク刻印



図 1-8-10
透し彫り金櫛 (K20) べっ甲半月形櫛・笄
丸嘉
大正5年12月『演芸画報』より

地漆塗り櫛。

図1-8-16は図1-8-14広告下の櫛とほぼ同形、同種の月形木



図1-8-15
べっ甲蒔絵半月形櫛
撫子図



図1-8-14
べっ甲他、大型半月形櫛（上）
と月形つけ台漆塗り櫛（下）広告
ほう祢んや
大正6年2月『演芸画報』

図1-8-15は広告上の櫛と同形、同図柄の実物。
「千代田形」と呼ぶこともあったようだ。下は「や
まとぐし」と名付けられた安価な人気役者の紋入りつけ櫛。

図1-8-14若い女性（若奥様や令嬢）向けの大型半月形櫛広告で



図1-8-13
べっ甲金、プラチナ棟装飾半月
形櫛・笄
菊図

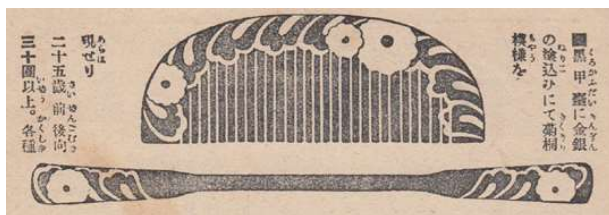


図 1-8-17
べっ甲金銀飾り挽き残し半月形櫛・笄
菊桐図
三越呉服店
大正4年10月『婦人世界』より
25才前後向きとある。

一部が櫛歯に入り込み、歯が一部挽き残されているので「挽き残し櫛」と呼ばれた。大正初期に始まる代表的櫛の形の一つである。
 図 1-8-20 はべっ甲挽き残し都形山高櫛の実物。白甲の高級品である。



図 1-8-16
月形木地色漆塗櫛



図 1-8-20
木蒔絵半月形櫛・笄

ここまででは主に、べっ甲の櫛笄を紹介したが、これら以外には中級品の木蒔絵や普及品の安価なセルロイドの櫛や笄もたくさん作られた。図 1-8-20 は木蒔絵の櫛笄。図 1-8-21 はべっ甲に似せたセルロイドの櫛。



図 1-8-19
べっ甲真珠入り棟透し半月形櫛

図 1-8-19 は棟透しべっ甲櫛。広告資料やカタログ資料は見当たらないが、棟透しの金細工櫛(図 1-8-7) や金の棟透し彫り櫛(図 1-8-10) があつた時代なので、棟透しのべっ甲櫛も作られていたと考えてよい。特注品かもしれない。



図 1-8-18
べっ甲挽き残し都形山高櫛
鞠まり図
鞠の花の図柄の花芯に極小真珠を嵌め込んだ手が込んだ細工。



図 1-8-23
つまみ細工月形櫛 2 種

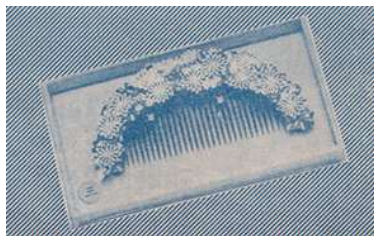


図 1-8-22
つまみ細工月形櫛
三越呉服店
大正 5 年 12 月『三越』より

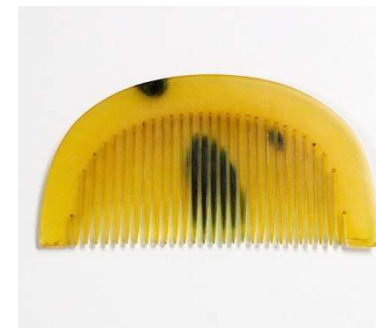


図 1-8-21
セルロイド半月形櫛

この時代には少女用のおしゃれ櫛もたくさん作られた。
図 1-8-22 は三越カタログからの少女用つまみ細工の櫛。
8-23 はその実物。
絹地を小さく折りたたんで、ぎっしりと漆塗りの木櫛に貼り付けた少女好みのカラフルで安価な櫛。明治時代からあるが、大正頃にも少女用の定番櫛として高い人気だった。「花櫛」とも呼ばれ、昭和初期まで盛んに用いられた。

少女といっても7、8〜10才位までの年少の女の子用には、「前飾り」という髪飾りもあった。

図1-8-24は三越で売り出していた前飾りの図。図1-8-25はそれと類似の実物。こういうものはほとんど残っていないが、少女のおしゃれの変遷を知る上では貴重な資料である。



図 1-8-24
少女用前飾り

三越呉服店
大正5年12月『三越』より
下のリボン状の飾りは頭後ろに下がる。



図 1-8-25
少女用前飾り
リボン状の飾りはないが前図とほぼ同様の前飾り。

この項の最後に図1-8-7などで紹介した両天筭については、もう少し見ておこう。両天筭のデザインにはさまざまナバラエティがあった。図1-8-26は三越カタログから。図1-8-27、図1-8-28は類似の実物。中心に小粒真珠をあしらったものが多い。

筭は鬘まげに挿すものなのでほとんど目立たないが、日本髪の女性にとっては大切な装身具。そのこだわりは強かった。



図 1-8-28
真珠入り金 (K9 か) 両天筭



図 1-8-27
真珠入り金 (K20)、プラチナ
交り両天筭

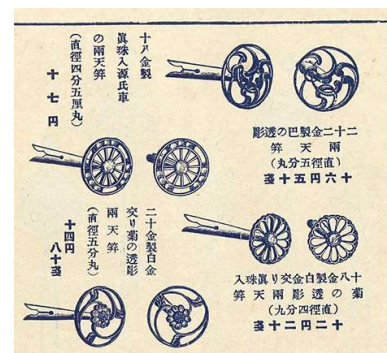


図 1-8-26
各種両天筭
三越呉服店
大正 3 年『三越』付録「金銀
細工帯留と頭飾品目録」より
18 金、22 金製、プラチナ交
り、真珠入りなど。